

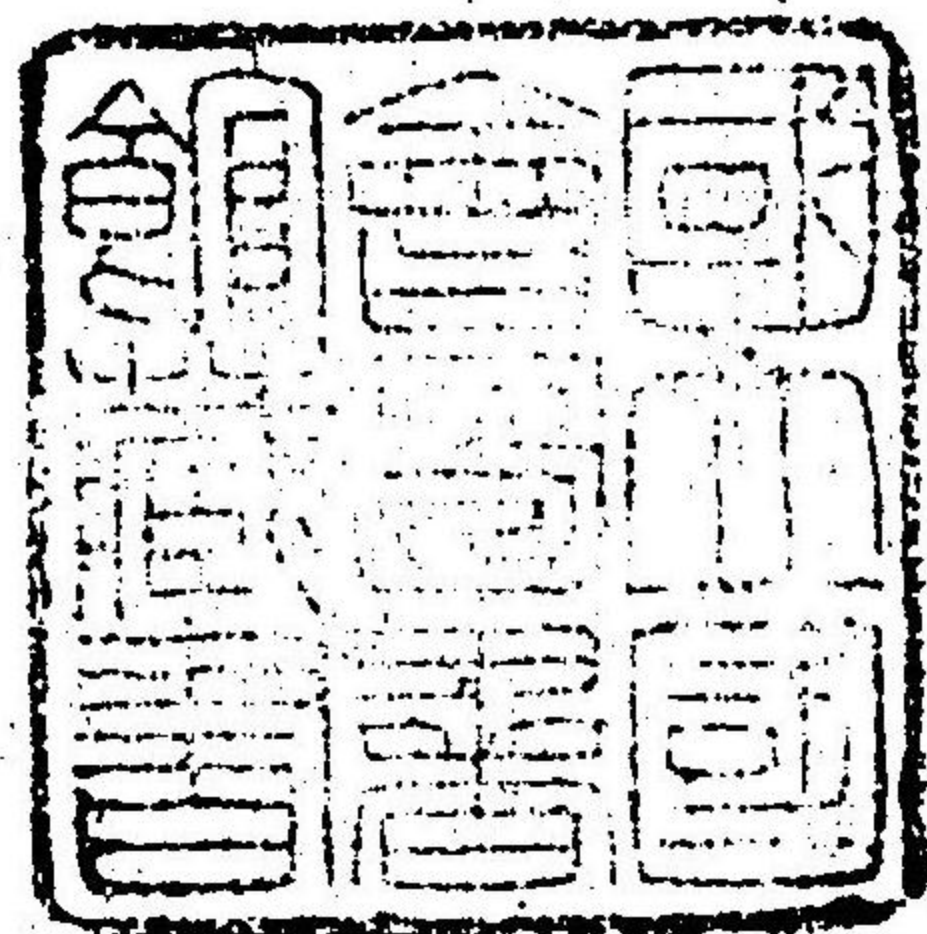
妙
好
人
傳

平田思永著

四
篇

188.72

H532m



338414

妙好人傳四編

○越中幼女

越中國の鹽村大永寺に七歳にありける幼女疱瘡を煩ひ養生のためて三里ばかり北よあたる富山に類寺へ父母ともよゆきて晝夜看病せられけるが次第に病おもりて往生の覺悟もいかにあらんとおもひおがらすゝめかねて日夜歴るゝ再取戻すべきやうなき病躰なれば母とき間を考へて問やう其方ハまう死ぬるてあらふ今死らば何方へ行ぞといへハ幼女目をひらきて母の顔をながめてをしハ死ぬハ極樂へゆきます阿彌陀様の御馳走をなされて待かねてござるやいひて念佛せしお又母尋ねてそは極樂へはいかにて行ぞといへハ幼女の言



妙好人傳四編

二

阿彌陀様よおはれて行まるといふ母大さによろこびてこれを住持に
かたる住持も喜びて枕のもやよゆき今一往たづねんといへば母これ
をめでめてあけやうに苦しかりて居ますもの止まると下さきといふ
住持き入れを右のごとく問ければ答ふこと又同座借亦問やうは
何ゆへに阿彌陀様がおふて行まるといへば幼女の去りしはわ々
はさらぬを阿彌陀様いわたくしがわゆるてくからぬをふか
さいへは住持も落涙して佛智不思議の御念力が幼女の胸の中まで入
こみて斯のごとく領解いたさせ下されもりと喜びしを其頃世に傳
へて知ざる者なし淨心房充賢師常の物語なりやと

○濃州樹誓

美濃國大垣縁覺寺の坊守千代女ハ御法義よこゝろざし厚く志て佛祖
の崇敬一方から殊よ仁愛ふかく上を敬ひ下を憐人よて有縁の同行
庫裏へ參詣のせつハ御法儀の物がたると志て實意より誘れしゆへみ
かく歸依せしやん或年の秋此寺へ陳善院僧樸師を請待とて講演
をねがひ厚く馳走を申されしゆへ翌年乃春同師より慇懃なる教諭の文
を贈られしがいや貴きこととて「左よまると」この坊守彌増に御法義大
切にこゝろおけ老年よおよひ薙髮志て樹誓と号せしが寛政元酉の春
二月廿七日享年七十歳にて往生の本意とどげられしやと
○このあひハ御住持より御文下され忝存参らせ候誠よ去る秋ハおが
く逗留いもし御心易御法の物語など不思議の因縁ととりく思ひ
出し参らせ候て稱名相續いたし候貴とどさほにハ兼て御心があふか

くもて去年逗留のふしも御法儀の御尋其ふしあらしく示し参らせ候
へども若やまたくとりつおきつ疑ひいからいせ給ふことどもや侍ら
んぞ察しまいらせ候ゆへ一筆申入りし我心のよくまみて佛願よ叶
ふべしと思めす内い疑ひやむまじく候濁らばよごまはをえと我
心に目どおけおとてひしを願力にすかり不思議とあふき参らせてま
きにも悪きにも念佛申外他事なき御事候我方にて右を見左に見て
おふおふおとあておふ間は縦令千年をふるども是てこそぞ落着の
日はあるまじく候此度は一念發起いざいざいとも手おりのむき極
重の悪人が發起のべき身よて發起する事よあらざ只これ若不生者
の本誓よまおとまいらせ不思議くとあふき奉りて稱名念佛おとる
べく候がへびく我心よていからひるハ一生決定は心よいかられま

じく候よて御文章よは不可思議の願力とて佛のいたより往生は治
定せしめたまふぞ御示し下さるゝされば此御一言よて疑いはるゝ事
よておいしませし候只願くば日夜の内よ浮生夢幻といふことと兩三度
ほぎづくおもひたまひて御恩の稱名念あるまじく候夢とありて夢
としらぬい思よおぼえまいらせ候何事もあらしくいし

二月五日

釋僧樸

緣覺寺

御内方さまへ

○千代女

九州に一の大國ありて淨土眞宗の御教ことみ御繁昌ましくて道俗

男女ふかく喜めたるが故ありて切支丹同様の禁制とぞなりたるし
るに寛政の頃とや其領主の家中に青木清助として五百石の侍ありそ
の娘に千代といふものありたるがいかる宿縁や世どうきことよ
おそひ佛法に志ふかくあらゆる知識にあひて法華經を始めとまぐ
の御法ともむれともつみ深き女人の助るべき教のおきとまげき居
たるが不圖同行み出會彌陀本願の御義とハじめて聽聞し誠よわた
くしの根機相應の御法なりて無二の信者とありひそかよ御恩を喜
び稱名念佛念ふれども國の掟きびしければ同行よ親み不審のこと
どもおもひのまゝ聞たづぬることおもはば花見遊山よこせよせ同
志のものぞおもらひてぞ聖人の御としへ殘むたおくきノ届けノるあ
るときはの千代申けるはるる御としへ聽聞申たてまつることひや

へよ祖師聖人の御おげを此とまゝしほらばあらまきき女人の
身代うへ惡趣にこそおもむくべきとてとくありおまき事よ侍る
か此御恩をばいかにて報たてまつらんあはれ一たび御本山へ參
詣いたし一天無二の御眞影様よ拜禮をせび御恩を喜び申さばぞか
しうれしからん其上には此世よ望ららまきとのくいかゞやいひ
くれば木村良會が妻せん外記村の百姓初右衛門からびに藤藏口とそ
るゑてきてもあるがたき思召にて候まだ御わかき身のよくもこそ仰
られけれ我々も其ころさし兼ておはし候へども國禁を恐れていま
だ本意をやび申さざらば不定の露命一日もはやくおもひ立べしと
ひそかに旅立れ用意とて上方見物と申して同五年丑春千代年十八
歳にて同行三人とぞんかひ終に參詣をせび御眞影様に拜禮いたし國

の名どかくし善知識の御盃をいたゞき御膝元の御法筵にふるびく
 あひたてまつり御安心の御糺をうけとが領解のあやまりなきことを
 よろこび名所舊跡の見物よはまこしん心をとゞめどこれ生涯のいじ
 めをいりなりてて兩御堂ばかりよ御禮をまげ速よ國よがへり兼て御
 法度のことせなれば此こやたれにもいハされどそいめど忘ておれき
 こつけん千代年廿一歳の秋七月朔日おんひおけおく吟味の席よよび
 出され長役長谷瀬常也〔知行五百石〕筆役杉原長八〔知行三百三十石〕その外
 役人廿七人列を正しく四人の者どめしとへられ長谷瀬千代よむかひ
 て申けるハ其方どん何と心得て御國の御法度をそむき淨土眞宗に歸
 依しあまつさへ京都本願寺までも参詣いせしや有体申あげよ其頭
 取ハ誰なるぞとありたれば千代手をつらへ頭取ハ則私よて御座候御

國に住居仕ながら御法度背し御咎ハ誠以て恐入もてまつり候只後
 生の大事のこころよかりハからん御國政をそむき候段一言の申こ
 けハ御座なくと申上候へば役人重ねて御法度をそむき淨土眞宗に歸
 依するものハ御仕置に相なることおねて承知もいたすべし其方ども
 御國を立出候こと本願寺参けいにてハこれなく伊勢参宮どもよてハ
 是なきや千代さしうつむきとばらくありて申さるハ心にもなき白狀
 と仕候ことハ第一御殿様へ偽を申上候道理にて實意をそむき申候か
 く露顯のうへいいたしおる御座なく全本願寺参けいみて神まうてよ
 ては御座なく候常也眉をひそめてくそれハ是非なき白狀ありさ
 りながら以來屹度心底を相改淨土眞宗の教をふつよりとおもひきり
 先非後悔の御ことと申あげおは何とぞおかしのいたしかたも是あ

るべしとにござりてハ御助命ごすけのみことも相あひあはるべしと申されけきは千代涙ちよひなみの
うかべこハありがたき御ごをさげハ御座候ござり候へども露つゆの命いのちをおしみ後のち
の世よの大事だいじを仕つかそこをひ候事ごころ歎なげかしく將はた又また願力ねんりきの御不思議ごふしぎたり御戴おんたい
せにあづかりし信心しんじんみ候ごころへば此千代このちよひが料簡りょうかんよて改あらため候事ごころも出來仕しやうらいら
ぞそ乃義なほハ平ひらみ御斷ごことわり申上まをさたく只恐ただおそ入候いり候とハ御法度ごほつどやぶりがく御役ごやく
介かをかけたてまつると宗門そうもんのいましめよてもしも善知識ぜんちしき様さまきこしめ
さば御ごむねをいたせさせまふらんそれのみ心外こころわいみぞんじ奉り候まをさ
れも露顯つゆけんれうへなればちがらに及およばす何なにごとも私の不調法ふてうほふみ御座候ござり候
一旦いつたんの命いのちに後世ごせいの大事だいじはかへられ申まをさぞ候御仕置ごつかぎハ覺悟かくごたまへよ御
座候間ざ候ま御定法ごじやうほふのじと御取行ごとりぎやうい下くだされ候ごころてもいさハ御ごうらみに存ぞん
奉たまらぞ誠まこと堅固けんこの申まをさやう武士ぶしの覺悟かくごもかくこそあり度たぐとぞ見えけ

る常也つねや外ほか三人さんにんのもののみむかひ千代ちよひが返答へんたうハきこえたり是これは一人ひとり
の吟味ぎんみなればありていみ申まをさあげよ改心かひしんだよいたさハ助命すけのみことのまをさし
ぞもいたまべし生死しやうじふあつあつの境さかいなればこゝろまづかよ返答へんたういたせと
あまをまハ三人口さんくちをまへて申上まをさるやうお千代ちよひどの一人ひとりの頭取かぶとを申まをさ
よても御座ござりなくいづれも同どうやうにて今死いましても往生わうじやう一定いつじやうと覺悟かくごの外ほかは
御座ござりなく候御作法ごごさうほふの通り御仕置ごつかぎをぬがひたてまつると申述まをさければさ
てく揃そろひもそろふたりまからば御國ごくにの御政道ごせいだうにはかへがたし御仕ごつかぎ
置おき仰付おほせつけらるゝであらふ申置まをさたきこやあらば遠慮えんりよなく申まをさのべよ千代答ちよひこたへ
て残のこりたなき御慈悲ごひいきの御ごをば今死いましる身みの何なにをか申残まをさすべき去さり
がら有縁うゑん人ひととへとて硯えんを今いまうけ紙かみをやりいだし辭世さいせいのこゝろよて
南无阿彌陀佛なんぶあみだぶつをかしらにいたゞき

南無といふ其二字に花をきて阿彌陀佛をぞ身ハ成よける
 无用なる世間のはなし差置てぬむあまた佛と御名を稱へど
 阿さ夕れ鐘や太鼓は聞だともむあみ佛は常よわゆるか
 彌の爲ぞ思ふ心の有からばむあまた佛れ所作をわするか
 陀といもる三途れ苦をば引かへて佛果に登るともよるこへ
 佛法のもうとせとせんじかば娑婆執着はすてよるこへ
 かくきたしめとせし出せば役人の心みは感じ侍れども國の掟おれば
 とて四人をおらひとつまくらに御仕置とぞ定まり皆々不思議れ往生
 汝遂にけとせむるに國內の同行よとをおらいとまごひのこころよて
 我とくぞ御仕置れ場所へ見物よ出けるが千代とせはじめ四人の者金
 剛堅固なるありともとせむるおめてとせばえと異口同音にともようみやうの

こゑ天地よひゞき出役檢使れ人もみかかん涙を催し心のうちよは稱
 名はとせむる人をおりけととぞ追く傳きくひと誰もくくことそ
 有たけれと國內御引立にもとせけるをみや此千代せんの兩人はかの
 松むし鈴むしよとせらば初右衛門藤藏ハ住蓮安樂れ兩房にことおら
 ぬこそ汝思出いとありおたく尊き事にこそかゝる不惜身命の喜び汝
 きくよつけても實よ思はるいわれ人の身のうへからせや鐘や太鼓の
 御催促は常み耳に聞おら假れ浮世に貪着のみとて御法座にも参る
 心かく誰はばおらぬ法國に住居とをおら同行善知識に親近とて問た
 づぬるこころもおこらせ汝もてはれて我家に安置しもてまつる御佛
 よとへ朝夕れ御給仕意おちるは必竟後生大事のおとひうすきよと
 人並名聞の爲躰實よいづべき事也ぞ自己返照とて御法義よもやづき

たふふべし

○筑前國市右衛門

井原市右衛門ハ筑前國宗像郡福間村稻川屋源右衛門弟也其母佛
 法よこころざしふかく彌陀の本願歟信じ專二心をかこきされハ文政
 十一子年市右衛門誕生幼名を虎吉といふ此人六歳のころつねみ法談
 のまねをかしあるひハ葬禮のまかひをまて樂とをるそれさま世れつ
 ねの童子よ類せむむかし聖徳太子ハ御年二歳の春東方みむかひて南
 无佛と稱へたまひ又高祖聖人ハ四歳乃御じきひをかに樹下よまて泥
 砂を集めて佛像をつくり西方よむかひて靜に念佛たまふと他の傳
 にみえたこれらのごハ錐囊を脱するのふとよまて佛菩薩の内の

証おのづからあらはるゝ處あるべし今この虎吉ハ權者代化義にハあ
 らねども其戲他は小兒よ異ること奇といつべしとて十二歳よまて父
 よはふれ世の有爲無常のあまよまてふむくごどり十七歳のころ他力
 本願の御いわれを明み聽んいたしそれよりこのかた法義相續のま
 がる殊勝成こやばかましつやよまててハみづから御佛飯をかしき
 その薪までも水にてあらひきよらむよまて是をもちゆる香花燈明を
 さへげてハ朝暮乃勤行怠こまなく常よぬむひを西方の淨域よびまし
 て西郷村正蓮寺ハ彼が檀那寺よて勸學立雄師の寺なれば諸國より來
 集れ僧多かりけるを毎々請待とて法話を乞と渴とて水をおもふがご
 じし又この村近くに官司やいへる處一村すべて淨土眞宗よてむかし
 より信者多ければ常に往來とて讚嘆談合をぞいたしける世の人わか

きやまの色のみちにも心をよせ戯れごとを好むならん成を此市右衛
門は只佛法聽聞をれみ樂どいたして志をも人の惡事をかたらん仁心
ふかく或どき浦人の進もつにあわび貝をもらひけるよ夜中よひそか
よ濱邊へ行てこまどはあち又ある時は一荷を蛤をせめて其蛤に六
字の名号をよめやがて海邊にいたり船を沖中にこきいだして人
の取ざる處よはあせしどめやめくる事度やあまれば浦人等きつ
たへて隨喜の思ひを生じことよ敬ひけるぞかんぎきに嘉永七年市右
衛門廿七歳にかりけるおはつ秋のころより病にふし殊更稱名相續退
轉おもりしが日を經ついと病ひ重くなりければ母をはじめ兄弟の
者どもくらのもやによびていつるやうハ我身も今年ばかりもあが
らへて居れば兄のあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあ
まもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあまもあ

淨土よまゝいり候也あまらざく往生の一大事仕損じたまふあかね
て聽聞のやどり彌陀のむ一念の信心ひとつよて易く淨土に往生
せしめたまふことやあまらに此世ばかりの親子兄弟みて未來離ればかれ
あまらばいとあまらざく事あまらざく併領解だよあまらければたとへ往
生はどくれとさだつても淨土の蓮臺みてこそ再會をいたす事おれど
いやこまやめにいひければ母人涙をおがし汝におはりあまらざくど
も娑婆の習ひおればせんすべもあし先に御淨土にまゝいりおれば何とぞ
これにその験をしちせてくまよとあまらければ市右衛門涙をおがしい
へるやうには何とぞのたまふや往生の後しるしあまらざく思ひたまふ
あ若其しるしあまらざくは往生ようたがひおこるべし只佛智の不思議
とたれみく往生疑をし決定をることよき往生の志しよてはるあ

よ來迎にこまより侍る事にて候おれといひて御稱名をよるこひけるが時や病氣いやましにて堪ぬければ母人いひて御稱名をわられたるやと催促しけれハ市右衛門重き枕をあげてあらありおるやと稱名しつゝいひけるハ御當流の安心は信の一念よ佛の方より往生を御定めにあづかり候へば往生におひて何れ不足もなし其後乃稱名ハ一聲も十聲も往生のためよ稱ふべきよあらざ只御恩報謝ぞんじ候外おしと聽聞仕候しかし命をあらんおきりハ稱名念佛すべしとの御教化なれば懈怠いたしてハ勿躰なきとおれども凡夫れあさましきよハ無事のやきハ世事よひかれてハ御恩をわすれ又この頃ハ病よせめられてハ御稱名をおこたりおくる御恩をらぞの不冥加をたおれども佛の願力にてこのまよおがらば御助けといひおくる廣大の御恩徳ぞ

やや只笑を合て御稱名をよるこお母人ハじめ兄弟の者を枕をとよ附添ひければ兄源右衛門公たのみて御文章を五六通もよませて聽聞しいひくるハ誠よおるおるものへ對せられて御ねんごるおる御教化いやあまおたき事とこそおもひはんべれを感涙よむせびて喜びけりかくて御稱名の聲次第にほそくおりしお八月三日ハ午眠るおどやくと往生し侍りぬ此時不思議かりしは御内佛の御戸二重しめ置しよ命終の時よあたりて二重の戸一時よきつを排きけれハ看病人も大きに驚さけるをかり又其日浦人海邊に居るに日輪の光黄金は色よ見え西の沖のかたよりその家の上にあたりて虹のやうおるもの紫色よてたかびきたれば見るものあやしそおもひける一人の僧ありていへるハ是ハ虹にてハおしきだめて報土往生の人あるべしといひて去る

ぬ此僧誰人ぞいふことぞとらざ此瑞相とて邊のもののみを見侍らしむ
かや御當流よハ臨終の奇瑞を要せさせやいふことぞとく奇特の勝縁を
さくはつけても御恩を尊み喜ぶたよりやもるべし

○播州平兵衛

播磨國佐用郡東徳久矢能村よ大林平兵衛といへる仲信の人あり中年
より御法義に入て無我に喜ひしと也或時他の同行來りて平兵衛よひ
かひていへるやうハ貴方ハ只如來ハ御助が難有とばかり言て居らる
ハが夫てハ頼一念がぬけて不足に存ると申ければ平兵衛答て私ハた
のむすべもとりませぬ愚ものたのまねばならぬ事なれハ如來様より
能やうにきて下ると御ざりませふ此やうな愚ものぞ御助けとは難

有やといひて落涙せしとまん其時難じける同行も感じ入て喜しとそ
或時平兵衛手次寺西蓮寺の報恩講に参りて諸参詣人の中ほどに居け
るが不圖立て参詣の中を推分て 祖師の御前まで行て打もぞれ落涙
し居々る其時座中の人々不審に思ひて其ゆへとたづねければ平兵衛
申やう持病の瘡氣さし起りしを申其傍に太祐をいへる醫者脉脉とう
るひ々るに平脉にてありしとかり依て後の程祐惠と申僧人のかき
處にて右のよしを尋ければ實ハ病氣よてハ御座りませぬ参詣れ中に
御開山の御影向を拜りましたかど申ことハ憚るべき事と存てつゝ
とけれども

御開山様がありくと顯れ給ひて御笑を含ませられし御姿を拜みま
しむと密みたりて他へ御咄しハ御無用になし下されといひて實ハ

私の日ころ御影向と申すことい仰しやるされどもいかにあらんや疑
ふ心がござりましたゆへの御方便いと難有存じますさいひしとさん
此人夫よる報恩講をあれば何方へも参詣せしとそ
同國上月村の常右衛門といへる仲信の同行の口とさみよ
ありおたや聞て聞えた一念いさむとるおんひ彌陀は社あれ
や常この歌をいひて難有やくと喜びしとさん

○雲州敬常

出雲國安來の里に原敬常といへる醫師有て信者かり日々朝とく起て
手次の徳應寺へ参夫より我家の勤行といもし佛壇をよくふきたて御
花よ水變もびかそよきたて替らるよると暑寒は分かく怠かりしと

ぞ信のうへより冥加のほどとおもはれてや平生節儉を守り鹿服鹿食
いふいかりおしその出生ハ川尻といふ近き在所よいあれども両親の
存生のうちらはいかゝる風雪の折も日々の伺候がごとくとて孝道
類ひ稀おとしとぞ報恩講營まれたるせつは新しき衣服を着してそは
日の七ツどき御開山様御迎ひとて手次の寺へまいりまも翌日の御
影向の御禮とてまいられしとて又書も書れけるゆへ人々たのみけ
れハ速に認ておくり夫と縁をして尋問し御法儀の物語をせられ
けれハ皆人隨喜せしとさん文化六年九月廿二日七十四歳にて往生の
本懐と遂侍りき

同所に極貧ある忌部屋善吉といへる者の後家深く如來の本願を仰
き奉りて活計のもめよハ小商をいたせしが兼て五文三文の錢を日

々に残し置報恩講を警んと用意せることを子供の盆正月を待たうに
指折て樂とせしはいや殊勝の事よこそ

又豊後國の長九郎といへる信者あり蓮如上人は祖師の御恩は盡ハ
とすれど夜ハ夢み見ると仰られし事をおもひ出せめて御恩報ぜん
とて薪を四寸ハかりみ切これを炭におさんため毎夜火み埋むとき
に御恩を思ひ又翌朝おきて取出れるときにおもひ出して日々おこた
らど喜びて炭とかし是を其年の報恩講のせつ手次寺同行衆への馳
走にいたされしとぞとがるに我等ハ年々御役のやうにおもひ人
まね仁義までの風情よいとむむしいや恥かしき事にあらどや御流
を汲たてまつらん人々ハ此思ひに住しあきことあらんかし

○伯州九右衛門

伯耆國川村郡泊村の九右衛門といふ人夫婦とも仰信の人をとしおそ
の宗旨ハ淨土宗の人おれども御當流に歸依し常々報恩の稱名をよる
こび夫より別れて手次の寺を大切に致して本堂を再建せしやかん此
人はじめハ博奕をこのこつねに喧嘩口論を事とするゆへ人々厄病神
のやうにおもひておそれしとかり然るよ四十歳代ころより宿善のど
きいあり實に我身ハ惡趣行と驚きて佛法に入惡より強ければ善みも
強しといへるが如く格別仰信みかりて伯州より京都までおよそ七十
里の處年ごとに一兩度づ御本山へ參詣して懇志をはこびしとさん
又あるとき言けるよハ私おためよハ名聞が知識かりといひて寺参り
も御佛前ハ御馳走申も御本山へ上納物とする手次へ志上るもみか各

聞様のお蔭で勤させてもらひまはせいでいひて慙愧せしとまん又御舊蹟
巡拜も兩度及びしと也こぞよ佛祖の崇敬あつきが故よ其家れ猫迄
も朝夕勤行のときハ必佛前に参りしとまんときみ此九右衛門常よ
へるやうハ彌陀を頼めよの御勸めハ三佛の同證おれいたとへ天ハ地
とまり地ハ天とまるぞん如來の御助ばかりハ間違おいとひて人を
も誘ひ厚く喜びけるが文政のころ八十八歳にて目出度往生ととげし
やぞ

○豊後關兵衛

豊後國岡の領分直入郡有氏村といふ處ハ關兵衛といふ人あり愚しき
ものかりしが厚信の人を同國府内に三味線屋何某といふことぞかし

き同行あり此人右の關兵衛ハ朝夕の正信偈御和讃等もつやまらぬと
申こぞかり夫ては實の信者のたしなみよハあらざといひて文をつと
りて關兵衛へ遣しけるよ一人の同行そのふみを關兵衛へ持参せしを
ければ關兵衛言やう有るき御教化かおわたくしが喜びが不足ある
ゆへ如來様よりの御催促からん私ハ生れつき愚痴にして文字ととら
ざ依て正信偈御文章も拜讀いたしかね候へども是よりハ一入厚くよ
ろこび申べく候私御報謝の行業の不足ハ外れ御同行に對してハ恥か
れども今生れ恥ハわづかの恥未來よて地獄へ墮おはば大恥よて候ゆへ
是より一入大切よ心がけ申べくぞいひて立腹の氣色もかく喜々れば
取次の同行も大に恥入けるとまん或時申けるハいづれの寺の御法坐
へ参りても女同行の多きハ女人ハ罪ふかきゆへ卅五の願の二重の綱

ぞおけあまひしゆへからんじ承り侍りぬ是よつきてもわあくしハ女
人よおとりし愚鈍の身なればこそ御助とありおたく喜ぬと申されし
じかん時に六十有余よて病床よつきける時其國の城下の富家のひと
く見舞よ來りける其家ハ實に貧窮よて家もやぶれ壁もおち折節雨
中よりけるが雨たたくやもりけり右の同行客人を雨れもらぬ處よ
筵を布て座せしめて少しも恥るけしきなく只よこくや打笑淨土よ
參らせてもらふこぞの嬉しやと御恩貴とるこぶ姿を見て見舞よ
來りし人ヤも感涙よむせびしとまり往生ハ文政年中の事かりとぞこ
の人おどハ文字もしらぞ世事のこぞも愚なれども信徳をして太きに
遠近の諸人をひきたて御法義のうるほひけるハ常行大悲の益おのづ
から備しとぞ

○奥州平左衛門

陸奥國安達郡二本松領小濱町よ岩井屋平左衛門といへる人あり淨土
眞宗に志て同處に法樂寺の門徒かり若き時より彌陀の本願を信じて
喜びしこといと殊勝かり尤此邊ハ御法義の薄き處かりしにこの平左
衛門といふ人ハ家内にて外のはかしたのしとせざる御法義
の物がありとあれハにこくと笑を含みよるこふこを常からぬ人か
り仍て妻子よ至るまで常云やうハこの惡世界へ生れ地獄一定の愚
痴の者此まゝかおら御助け下され候ことありおたやくとる
こべばさうぢやくとるいひて喜び申されければ家内も一同御慈悲を
よるこびたりこれ平左衛門世間の事よつきても無利といはば正直柔
和にして何事も實意よめて取成候故御領主の御聽に達し御褒美とる

て青銅壹貫文被下しとかり

此國かどいあしきくせありて子供一兩人出来れば其後の子ハまびく
といひて殺害せしが天明以來御領主より捨別よあはれみたまひて出
生の子供へ金銀米錢等も下され其上村毎に一人づゝ出生れ目附を立
置懷妊の婦人を月々帳面に志るし急度生育するやうよ吟味仰付られ
ついで小濱町の目附はこれ平左衛門へ仰付られれば難有ぞんじ奉
りて懷妊の女あれば其者れ所へ行て懇みいへるやうハ深山に住猿も
其子の害せらるゝを見てハ悲にたへぞ母猿の腸ぞんくよき野
原よ卵を抱く雉子も野火の燃來るぞんきけぞ其子を憐やあるよ况や
万物の長たる人間よおひてぞや又この南浮の人身をうくることハ甚
稀なる事なれば大切よ養育すべしと御法義の上より教訓をければ皆

ヤ感伏して邪見れ角を折しもの數多しとるん時よ嘉永元年申十一月
八日七十三歳にて目出度往生遂られしをるん此人の女よまことといふ
ものあり二十七歳にして天保十五辰年十月五日に病死せしが病氣よ
かりて平左衛門よ暇ごひを志て親よ先達ハ勿鉢かきことよおそひを
がら是非もかし淨土よて御待申べしといひて他事なく只佛恩をよる
こび今息絶んやするるとき聲高々や如來大悲の恩徳は身を粉に志ても
報ぞべし師主知識れ恩徳も骨にくだきても謝すべし南無阿彌陀佛
くと聲の志づかよるかとおもひしとき息絶ぬ二十人計の看病人
みも隨喜の心を生して稱名念佛せしやかり此平左衛門の如實による
こびしが其邊の御引立とかりしとぞ

○大坂幼兒

攝津國大坂尼ヶ崎橋の邊に住ける吉野屋大藏と申人あり家内みか御法儀とあつく喜びけるが一子と喜一郎といふ天保十四癸卯の九月の頃より發病して術なき中より親人と共に御法座へ詣て折々話する事みか祖意よ叶ひて有がたきことのみあり

一 あるとき祖母に尋ねけるは心性を父よりきよけれど 父はいつかあることなりや祖母答て他宗には我心をみかきて佛みならふとをさるゝけれど御宗旨よは吾機ハころきもれを見かきり阿彌陀様よたすけてもらふのじやざらば そんなら極樂へ參ればわろきころるも善心になりやすむとひひて喜びしやと

一 あるとき問 母さんハ祖母さんハ産だのか 父さんはよそから

來たのかわしい又母さんハ産だか 答はるほどその通じや 又言そんなら御聽聞すれハ私のためには阿彌陀様が本眞の親様じやをかせいひるまふや私ハ母様腹の中から出たるぞやと 祖母答それば婆れがりの親子なり 阿彌陀様ハむじしくから末のたまひけでいはらぬ親さまじや祖母も母も其方も同じ阿彌陀さまの子じやといひければ噫そんなら死ねばその本眞の親さまは御側へゆくのかといひてよろこびしやと

一 或とき問 祖母さん御文章みねてもとめても稱名念佛申せや仰られるけれど私ハねる時はどかへられぬといハ 祖母こもつて晝ハ散亂が止だら稱ハよ夜ハ目がとめもら稱ハ喜ハと聽聞して居るぞよと言ければ そんなら祖母さん 油斷なくよろこべと仰らるゝ

事のどいへいある程そふじやへきりへい小兒涙なまがして喜びし
まゐん

一 命終二三日前に薬を吞よといふとき 早く極樂へ行まいくや
申て西の戸を明て下されじと様よ西の方から阿彌陀さまが御迎ひよ
御出なまるといふことじやがまだ見えぬやいへば大藏いやくそれ
は肉眼でいとおまされぬやある程に今にそ外が見へぬやうにまるとお
おまると云へば又目を閉てまも見へぬへき言ゆへに 両親を言
やう此世のいのち盡ざるに其やうよ無理みゆきたいへき言は天道
さまの御罰があたるぞとやいへば 天道様も御堪忍下されと言しじ
かん 天保十五甲辰二月十八日七歳よとて稱名もるじも往生の邊き
法名は喜念を賜りしとあり

○江州権四郎

近江國志賀郡大物村超專寺の門徒よ権四郎といへる仰信の人あると
の男若きときハ不法儀よして唯今生よ立身せんことおみおもひて朝
よハ露をふみとけ暮よハ星をいたぐきて家業を大事とて働くとい
へどそおせごよ追附はや貧乏をいひしごとく万事よつけて節儉をま
もるやいへども富ることあたはど爰におひて一家親類までも厄病神
おやうにおもはれ又女房の寺参するれも禁ざるやうな邪見ものを
れども女房お志厚きよ引立られ四十歳の頃よと不請くに参詣いた
しけるうらよあるほど今生は何事も思ふやうよはからぬ後生こそ一
大事とおもひて法義よ立入夫よとこめめるは法をもまむることば渴
とて水を思如くみ聞て鐘太鼓の音ときけば道の遠きも厭はど参詣と

て聽聞せしが終よ宿善の時至無二の信者やある先寺へ参れば佛祖善知識へ懇に拜禮とげ勤行法談の間に合掌とて更に他事をし又下向のとき法談のよしあしぬいほ只大悲れ親さまの御引立ありやいひて法味を甘じて悦びけるゆへ見聞人々みか隨喜の心を生ぜしとらん或とき此男寺の磨もれへ手傳とせし時鶴龜の蠟燭立を見ていへるやう鶴ハ千年龜ハ万年と聞しが其方ハ不仕合あるものか我等ハ無常の風の來り次第に淨土へ参らせてもらふとはいとも難有事なりと落涙とて悦しやらん此人御法義に入しより追々勝手向もよくあり人よを用ひられけるこれひとへは佛祖の御めぐとありやつねみいひて喜ひけるが嘉永四亥年十一月のはじめより病氣にかこければ朝暮の勤行怠るし又家内のものよいひけるハ我をかきあやにて御法義を大

切よこころがけてくれよ善財童子は一句の法を聞んがためよ身と鬼神にあたへ禪宗の祖師ハ雪の中に手をきりて法を聞たまへり志あるよ今時の人ハ暖よ着飽まで食ひそれ上よ法をきくやいふハ能く宿縁の厚きゆへかり夫とハ何ともおもはせして疎かよおもへるハ實に残念あることあり返くも心をこめて聽聞とて淨土往生のためしむ身やあるべしわれも淨土にて半坐とわけて侍りぬといひて十二月十日に稱名もろも目出度往生とてびしとぞ

○讚州佐一郎

讚岐國山田郡植田村佐一郎〔手次ハ圓光寺〕といへる人はこのとき時よて佛法をよふとみて捨別仲信の人ありあるとき十川村の佐助古佛檀

を賣拂て新しき御檀を買ひ申さんと思ひし時彼植田村に佐一郎の友
 同行の中に古佛檀所望の人ある由を聞しゆへ佐一郎へ知らせければ
 早速見よ來りし其後佛檀を引出しよ入置し銀貳百匁の見えぬにつ
 きて此間佐一郎が佛檀を見に來しとき若や取らせぬかと疑を生じ外
 人をもて佐一郎みんしや御存んまきやと尋にゆきなれハ私がかま
 して御座るが暫く御延引下され調へて御返し申ますやいひ志が其佐
 助の悴阿州と歸けれハ早速そを事を咄してふやう過去の業縁を
 みゑて佐一郎はまれなる同行よて人も敬ふ人じやよと語りけれハ悴
 大に驚天して其銀子ハ私が取置しと答ければ家内中が恐入早速佐一
 郎へ右に譯申伸へ詫けれハ佐一郎いふやうハ物に間ちがひは随分あ
 るんばかり全く私が過去にてお前を疑ひし事のありつるゆへかりと

いひて念佛をまふし喜ひける姿を見て感入隨喜せぬものかかりしと
 ぞ或てき他へまねかれて美味乃馳走よ預りいへるやうは樂邦の百味
 の飯食ハいかにばかりならんを感じて喜ひけるが其後若者共鱈の汁を
 たきて食んとせし時ばかりならん行合せければ幸か汁を進じまじやう
 といへハはいくと言て相伴とていへるやうは御互に命終ると此通
 りに鍋や釜にて煎らるゝてござらふと落涙し念佛申ければ皆々感じ
 て涕をおさへて歸しやらん此人ハ毎朝御本山と大谷の御廟へ遙拜し
 て一錢二錢の志を筒にとぎめて御恩を喜ばれしとぞ時文化年中稱名
 もねとも往生に素懐をまげられしとまん
 因に記す大谷に御本廟へ御門末に納骨の御免かきるゝ事は一蓮託
 生乃思召かり 又御門末より大谷に靈地へ納骨を願奉るは御恩徳

と謝せんがためなりとしかれば誰れ人も上京のみぎりハ 高祖聖人
とはじめ御代々の善知識の御高恩を仰ぎ附てハ我親先祖に恩澤を
も思ひうかへて先第一よ大谷へ参詣いたすべきとあるべし
○玉日君に御廟ハ深艸西岸寺にあまは女姓は別て御先達に御恩を
思ひ奉りて足手をも運ぶべき事あらんかし

○石州磯七

石見の國邑智郡濱田領出羽村に磯七といへる世にまれなる信者あり
とある或とき同行一兩人たづね來りていふやうハ私ハ如來乃御助がい
まだとちつかれませぬといへは磯七いへるやうハそなたハ如來様を
ふづくりよかゝつて御座るがさうではなから能聽聞めされ追附如來様

にふづくらるゝてあらふといひしとある
或とき磯七の處へ有福の善太郎たづねゆくとして道を行すきて牧澤屋
へたづねくれハ主のいふよハ磯七どのよハ食物もあるまい米一升酒
一壺遣し申されれば夫と頂きて持行姿を見るものみかく隨喜の
心を生ぜしとある夫より磯七は方へ行て法味を甘じてそのれとす
れて互に踊りて喜びしとされと自分も踊りしとハ一向にほのぼの
善太郎はわしハ踊りハせかんだが磯七殿が踊りて喜ばれといふ又
磯七のいへるハ私ハ踊ハせかんだが善太郎殿の踊が面白く難有かつ
あじいひて己とわすきて喜びしとぞ
又此磯七の悴を門兵衛をいひしが親子一里ばかり山をへだてて炭焼
の活計をせしがたがひに一里の道を隣へ行ごどくにおもひて毎夜か

はり番よ通ふて御法義の物がたりをいもして歸りよ木枝を手に
もち舞て喜びく我家へ歸しどもん又此磖七は常に獨斷をもち癖あ
りしが或やき磖七垣を結ひけるが咄しの聲高く聞へければ嫁れ言に
ハ彼方ハ誰と咄とし給ふややいハ如來様とおはかし申せしが面白
い事であつもどいふ此人の口すきとよ うれふておらぬ責ふてお
らぬ此身が佛よあるハ彌陀丸たすけ と常にいひて喜ぶ或やきい
へるやうは酒をためば本願れ酔と酒の酔とてあふて難有ともく
といふて喜びしやかり此人のつねよをわりて居る上におたよ竹筒
に花をさしてあふけれハある同行のもづねにおまハ活花がすきか
とハば答よもつともおらぬおあは花ハ御本山の両堂へ毎日お花を上
ますおらぬとぞ

或どき矢上村より磖七殿よまばらく逗留するやうよ御出下されを傳
言を述べられハ此節ハ参り難しと申す依て今ハ男いふやうハ此やうな
閑敷處よ居より賑々敷處へ來たまハば御ちそうもありませんといハば
此邊も一木村の淨泉寺殿をはじめ四方八方よ御寺方の御勸化ありて
閑敷こやハござらぬ處かりといひしやぞ此人ハ出羽村眞清寺の門徒
にて嘉永三戌れとし十二月八十余歳よて目出度往生とやげしとぞ

○石州善太郎

石見國那賀郡下有福村よ善太郎やいへる大同行ありこの人ハ千田村
淨光寺の門徒あるとあると道中するよ旅行佛様を首よかけあてまつ
りて片脇よ花立を登へて御花を上されハ同道せし光現寺の坊守梅の

小枝よ花の二三りんもつきたるをまゐらせけしハ善太郎いもゞきて
いふやうこれ花はいづれよ御賞ひおされしやせいハ坊守のこも
へよ人の屋敷ありしを折ましたとこたへたれハ善太郎いふハ梅
や桃ハ實の結ぶを人の樂んで居るものかれハ此後ハ賞ハまして手折
たまふおといひしぞ

或人有福村の入口に來りて善太郎同行はいづれやもづねれば私て
御座ますや言おまへの家は何所で御座るやいは私は家は持ませ
ぬやいふ夫ハ合點のゆかぬ事と思ひて誰その家を借りて御座るか
いへば私は如來様の家に置てもらひますといへば今の同行感じ入て
泥の中に手を付て落涙せしとまんこの善太郎他へ出入のとき女房よ
物いはぬ先に佛前よ御禮をまげしとぞ

この善太郎の近邊弘法大師の八十八ヶ所を近年建立して殊の外繁
昌せしゆへ參詣せし人或やき二三善太郎も宿を乞ければ心よくか
していへるやうは弘法大師の御利益より猶あまがもき事があるとい
へば何卒その御義をとしへて下されや言夫よ自身の聽聞せしこと
を懇々咄しけれハ感じ入て速に彌陀本願の貴き事を信じて八十八
ヶ處へ參ることとを止て喜びく我家も歸りしとまん 或夜若いもれ
ども善太郎の家外にかけ置し干柿をぬすみに來れハ善太郎聞つ々
て家の内より言やうハ若衆怪我せぬやうに取て歸り召れといひけれ
ハ誠々恥入てにげしやぞ 或とき盗人夜中よ入れハ善太郎息をつ
めて念佛だよ申さぬやうに志て居けるが盗人の物持出るやき言やう
私が前生よて借し品とりに來て下されたハ御苦勞かりやいへば盜

賊もあきれはて品物其儘に置いて歸りしやさん

又養子に忤御法義に志うすきゆへ手びつきて參詣致して下されとた
のこ又自分參詣とて歸りしせつハ其方の御かぎて參らせて貰ひしお
りと志みぐく禮を言しやぞ 此人御本山の志をぞり集るとき人の上
るを見て兩手をあげていたゞき自分よれを貰ひしよとも喜ぶ安政
二年の春手次の淨光寺上京につき善太郎びつれて參るといわれけれ
ば此老人何れ御間よれあひませぬよ御つき下さるハは誠にあまがふ
き事ありと喜び付ては善知識様へ御土産を上もひやおんひ彼寺の客
僧正蓮寺へ申やう御客僧さま御坐の上よて此事を御演話下されやい
へハ同寺尤れ事ありといひて披露ありなれハ同行一同隨喜して凡金
子壹兩三分程集りしと五尊前よ向ひて戴き又同行中へ向てもいもぐ

き喜びく上京とて上納せられしとぞ此人道中よても近き處に寺が
あると立寄拜禮とてとろこびしとさん 元來掟を如實守しゆへ御
褒美も兩三度戴きしがそ乃度毎に二分三分づゝにこけて親類をハじ
め懇意の同行へ贈りしとさん此人仁心ふかく志て灰を焼やきハその
近邊を能掃除し物に命をやらぬやうに心をつけしとさん
或とき僧確といへる人善太郎に仲信あるを感じて詠玉ひしとて
御としへよ隨ふ耳のあかかしこ信あれハ徳有福の人

又これ人酒を二三杯のむじやれくうれしやありがや生や世々の
初ごせに私ハ全体惡太郎かれと御かぎて善太郎と言て折にハおどり
たて舞あつして喜びしやさん

此人柿梨子に類ひともせめて寺へ參詣のせつ御堂に庭に店をいだし

置その傍に錢筒を置いて自分ハ堂の内に入聽聞申けるに多くの人其品物をもとめて筒の中へ錢を入る其徳分を三ツ割て御本山を手次寺で自分ハ參錢とにせしとまん時安政三丙辰の春二月八日に七十五歳にて稱名もろじも目出度往生遂られしとぞ此人は今清九郎を異名せしとまり

○奥州武右衛門

陸奥國伊達郡大石村に武右エ門といへる人あり生れつき強氣れ人ありしが御法義み入てよりふかく懺悔して佛恩を尊みたり元より大善寺ハ門徒よししてその道遠々れハどのづから參詣も怠るべきとを悲しみ五十七歳の頃寺近き所家宅をうつし本宅改悛にまかせ隱居の身

とまり日々參詣してよろこびしとまり殊も霜月ハ聖人御往生の月かれは淨土參りの親様御大病の時節やこころへ御看病の思ひをかせしとまん

一ツ御本山崇敬のあまり内佛の片脇に箱を掛け置日よ二文三文寶錢といふし年々不欠よ上納し又兩親の祥月等よ相當り候節かどハ多少に限らざ志上納して申やう我身こそ人み勝て大欲非道の者かればかゝる御慈悲が聞えればいかかる惡事も仕出し兩親の死後の恩もわきまへば人とも惡趣よ導き墮をべき身あるを大悲の御惠みよてこの世あら安穩に世をわたらせたまはること現當二世ハ御大恩をよじよるこびけり 或とき昔の明月女の萬行寺へ歩をハこびし事深く感じつゝ我若年のころ法義よ心なき折上京して何心なく御本山へ參詣せし

こと歎かしく今一度上京せばやと年々其おもひありといへとも村役
とつとめ升年ばかり役儀よ身をとばられ年老て退役いふせしが上京
の願ひも叶ひがたくせめての志しやおもひ七十一歳の秋大谷へ参詣
をいたしおもひにて十月廿五日まで京着の日數どばかり道中三十日
の積りにて世用をいふれ他出だやめ寺へのみ参詣といふし十月廿七
日御追夜のせつひそがよ本堂代寶錢箱へ御本山并大谷れ志二通り
つとみ(金百疋と同五拾疋と)入置ければいかに志やと思ひしに武右衛
門の計ひしを後に忘られていとやふせかりけり夫より御法義の志い
よく深くなりしとあり 其後嘉永三の秋七月十一日八ツ時こぬ住
持よ参りくれ候やう申來しゆへ御追夜過み参々れば他へ片付し娘孫
までよびあつめ少々だゝ形見を遣して言やうこれハ我遣よハあらざ

皆是佛祖の賜なれば聊かきども如來聖人様よりたまはりし物を心得
我なき跡にも懈怠なく兩度の御命日御講へ出席して御法を聽聞し浮
世をまごせかしこれ予が一生のたのみかり若不法懈怠あるときハ御
住持よりくれぐ御異見下されて法義立入やうにふしたまはれや
こまぐ遺言せしとらん偕十二日よまをければ大鉢よ清き水を入
れ中へ蓮の花をさしてみづから其水を手よ汲吞て言やうハ極樂の八
功德の水はいか斗からんやよろこび翌十三日正九ツ時片脇よ坐し西
よむかひ合掌し稱名の聲もろとん八十歳を限りし目出度往生を遂た
る子供へ形見として

阿彌陀佛に乗せられて行生死海罪の重荷も船よまかせて
惠よれて法の花をさく春かれハやがて此身ハ南無阿彌陀佛

○奥州やぐ女

同國梁川安養寺門徒中村屋とく女ハ若き時よと貞實にして殊も佛法
 よ志ふかく壯なるとき御本山へ參詣をいもし本願代御義を聞開御慈
 悲を尊み五十有余にして夫にわかれ猶更ふかく無常とさとり一入喜
 びの色を増けり如實に家をおさめ上を敬ひ下を哀むのこゝろ厚く御
 本山崇敬のあまり年々報謝志しと上納し猶手次への懇志も他よと
 ぐれ貧なるものよ味噌米或は衣類かど遣し常々人にかたるやうハ世
 の中は有にまかせてほしくなる習ひなるに聊かりやも人に遣す心よ
 かりあるもひせへに佛祖の御かげあれば我に禮いふよハ及ぞお寺へ
 參り御尊様へ御禮申されよし御法座であるからばいかにもして參
 詣したまはれやくれくれ申聞せ又貧家にて内佛の報恩講必勤るや聞

てハ聖人様へ蠟燭御香其外膳部の品物等も贈り遣し其身ハ家内の手
 をひき勇ましく參詣し家事は多き中よも御法座と欠さぬ人かり因て
 其邊次第に御法義繁昌の土地やハかりぬ又信明院様の御代三業御裁
 斷やして御使僧室光寺代御教誡を蒙り借々是迄ハ己が自力を當にし
 て迷ひし事の悲しきよ斯る教よ預らばむかしく三途に墮つべきに
 其知識よ值たる仕合せ我等が心得まどひしハ大善知識様御一人よ引
 受させられ予が不徳いたり教化の行届かざるゆへと御悲みあらせ
 られ殊も寢食とも忘るとの仰を聽聞いたし實よ恐ま入て三里五里と
 へだちたる寺々へも參詣し無二の懺悔とし御苦勞の程を感じ奉り三
 業固執の同行代所へハ遠近といハま歩みまばこびて善知識様代御脚
 といため奉りしとを慚愧して人々を誘引せしや也又我家の報恩講の

節ハ二里三里のわももく諸方の同行へ人びまはしけるゆへみ参詣
 の人夥敷寺の御法座よりも却て賑々敷嚴重御うやまひ申御法談聽
 聞の上又御法話も願ひ自ら前よすみ出是迄聽聞せしことを申述へ
 共々法味甘じてよろこばれしや也又其後祖師聖人五百五十回御忌
 の折節も上京いたすに付箱根荒井の兩關所拔道いたしては關破の咎
 人とおるを恐れ多き事なりかく御法聽聞申すも御公儀の御仁政のま
 しませいこそ假令御本山へ参詣いたしても御法度破りては申譯
 して御公儀へ願をあげ通判を戴き表向上京し先御眞影様へ前々の
 心得違にて御尊慮を痛奉りしとぞふかく御詫を申上る心地よて拜禮
 し又有縁の大善知識の御化導の御相を拜し奉り御苦勞の御大恩を感
 入數日滯留して歸國の上年々不闕に國産の眞綿を多分上納せしとぞ

又近所の寺々に御法坐あるやきハ店の手代とはじめ小者みいたる迄
 参物をあたへ我身ハ嫁を誘ひ参詣し自信教人信は道理に叶ひ厚く佛
 恩を尊み折々家内の者へも我をき跡じてかからん家を納め先祖よ
 給ハるしも此鹿末なく上を敬ひ下を束むの第一よすべし貧ハ
 諸道に妨じやら申て今日不自由なれば兎角御法義も懈怠みかり易
 ければ子々孫々よいたるまで家業出精して御法義相續あれかしや懇
 み申きかせけり他宗の人々中村の念佛婆やを異名をよびぬ文政十三
 寅二月十三日六十九歳を一期として念佛と共に往生の素懐をあげぬ

○雲州きく

出雲の國安木といふ處の永井屋彦右衛門妻菊といへるもの歳廿五才

此して病の床よふしけるが苦しき中に猶稱名相續のよし手次徳應寺
 問訊よまゐられてその領解の堅固あるをふかく隨喜せらるゝて誰とて
 も草葉よ置露れ身をいつかきえんもはかりおまきまよして重き病
 にかゝりし身いとけて油斷をたたまふるを勤められしは重き頭と
 あびてさればとよ尊師此地へ來りたまふてより御法談承るたびく
 よ一心よ阿彌陀佛をたのこたてまつれば本願の御慈悲よて必たすけ
 らまふとの御事ありがたくぞんづきども世とある業のいさまかて
 御念佛も怠りがちよ喜し侍りしおころほどはがら重き病どうけて
 苦しと申ばかりもかく候へども何時命おはるども行先のくらき氣遣
 ひもかく淨土の往生と一定と心得て稱名相續する計よて候やいとす
 しくぞ申されハ誓鐵師よと隨喜の涙よ袂とほぼりけ、此上もかき

覺悟哉と申されればいと喜びの色みへて念佛せしが終よ往生の本
 意とどげたる頃ハ天明八をせ申の十月中の七日よそ有る臨終よか
 りて姑ある人枕のものとよよりて苦しといかよを問れられいとかを
 かる聲にて只ありがたやくとのこいひたるを鐵師これをきかれ
 て刀風一度いたれハ百苦身に湊る斷末魔の苦しき時あればんし世の
 常の人ありせハあぢきなく名残おとしを思ふ顛倒の忘念より外よい
 かに有がもやくとどいふことこの有べきや善導大師ハ淨土の莊嚴
 諸の聖衆常に行人たまへよあり行者見終りて心に歡喜を終るとき佛
 よとたがひて金蓮よ坐すとのたまひて他力念佛の信者にかりぬれハ
 佛菩薩ハ常に其人の前よましくして守り給へどもいまだ凡身をすて
 せんと果縛の穢體あるほどハ攝取の光明の我身とてらしたまふとも

見あてまつらば化佛菩薩のつゝの眼前よましますとも拜し奉らざらむ
よ一期の命已に盡て息たえ眼とづるを兼て證得しつゝ往生乃こと
はりこよあらはれて佛菩薩の御相好とも拜し浄土の莊嚴とも見る
かりや聞つきはきく女の臨終みありおるやくと申けるもさだめて
佛菩薩とや拜しけん浄土の莊嚴とや見奉りけんとおもとれてそゞろ
身代毛もいよだちていざたうとくこそ侍れ又聞といへとも信せざれ
ば聞ざるおごしとされば經よハ諦にきけ諦にきけよくこれを思念せ
よと説給へハ今この菊女をよく聞得て深く信じけるさま經文よ叶ひ
又自らの名も相應とていとたふととのあまりよ
きくといふ其名もとるし法は道迷いて西の御國よぞ行
や鐵師とせせつ書てその家へ贈られけるごおりおくる物がごりとき

くよ付ても愚に過ぬる我身ごごりみ報恩の經營嗜きたき事よこそ
有人の口すきみよ
合點行はゆくまできやれ聞ハ合點のゆく御慈悲
おてんきたのハ聞たじやかいぞ夫ハ知たの覺えた方
おてんせいとハ口ていへと不思議くの外ハかい

○濃州山中銀十郎

美濃國中島郡東方村山中作右衛門悻銀十郎といひし人ハ幼年より諸
の藝道に身と打まかせ廿歳ばかりよて奥儀傳授を受し品數くありし
とぞとるに廿二才の冬より病ひよかへり打ふしけるお或とき夢に
表門口よりあいたゞしくはしり入ものあり汝何者ぞと問ひたれハ答

よ我どとらざやこれハ無常といふものなりといふて夢さぬ夫と
打驚き御法義大切ニ聽聞し病氣ハ勞瘁なればとて全快かりおたし
と死ささいめ信心決得て未來をたのしみ佛恩報謝の念佛の外他事
かしくて両親に暇乞をし葬式の列焼香の次第も門人多く有けれハ
くとしく書記只死をまつのみかりしが勞瘁にてせきの止間おかりし
ゆへかねての願ひ命終前三日はかり此せきをゆるし給らば心のま
よ念佛申さんと申せしが既五月八日午時頃よて瘵はたを止せぬ偕ハ
死近付たりとて深くよるこびたれひのまよ稱名をとまへ同十一日
己刻命畢りぬかくて手道具をと取片付侍りし中とり一通の書置出た
りその文よいはく

文化十四丁己年二月予臨終よおよんで當流安心のおもむき興雲寺

昇道和尚へ相尋る儀予が安心病氣におかされ彌死するに究り死を
れハ地獄より外ハ行方のおき處を阿彌陀如來の仰よハこれともの
め助んとある誓願にせんかたおけれハまがせ参らせて其上命を限
りに佛恩報謝の念佛申候と申候て候へハ其通りよて往生一定と
仰下され候へハ難有そんじいまハはや安堵致安養の往生を待受申
候がしく

二月七日夕方病筆

名残れしくおもへども娑婆の縁つきてもおらなくとて終る時よ彼
土へハまいるべきあり
御両親始其外諸親類衆よいたるまで一人も不殘彌陀を一心よたの
み極樂へ御往生可被成候彼土よて今日とり御待受可申候

るほどよと仰下され候ゆへはいくじ御受申て御報謝の稱名時々刻
々によるこばせてもらひまは又問言只今の御相續の姿いか御喜ひ
かされ候ややいへハこたへて我身れあさましきを見てハ御本願の尊
さとおもひ御本願のたうじきを仰ぎてハわが身の澄ましきとおもひ
繩の如くに御慈悲よまとひつかれ我が機に法が離れて下されぬ故命
畢るまで繩はごとくに相續させてもらひますといふて稱名を唱へ外
にことばおし又幾たび尋るとも此答の外に一言もかかりしとぞ此人
七十にあまそ元より家貧なれば衣食れ乏きを他の同行氣の毒よおも
ひ衣類夜具等までもそれくよ贈りけるがくめ一人の悴あり此者殊
の外の放蕩ものよて博奕大酒よ日夜を明し暮し母のもとよハ居るこ
やおしおかれども博奕に打まけし時ハ來りて母の衣類夜具等も残ら

どはぎ取持出行跡よて糸ハ寒夜よ古衾一重とかり言やう誠に悴れ惡
知識のあればこそ寒夜寝られどして佛恩師恩とぞ知らせてもらふ若
さおくて暖よ着て寝入るあからは御恩徳も打わするべきものぞといひ
て喜ばれしをぞかやうよ着類をもらへばせられすること幾度ともし
その後ハ近邊の同行の方よ預り置夜分よかると着せにゆきて晝の内
ハ預りて内よおかぬやう外同行より心を附しとぞされどく免ハ貫ふ
とも取るゝとも一切心にかげざりしとあり又或とき悴の所持の博奕
よ用るかるたじいふ物の棚にありしを大きよ古びたるゆへ不用から
んとおもひ火よ投しが跡よて悴のゆふやう此棚に己が大事の物を上
置しが知られどややくめ答てかるたなれば古きものゆへ不用かとお
もひ火よくべしといふ於此悴大きに立腹し己が一大事の物を火に焼

き給へいとたれ大事よかけらるゝ本尊と大分古びありこきをも火
よ焼んどて内佛の本尊(石すりの六字名号)とばづし來て火にかけられハ
く灸いへるやう儲々わがためよ無量劫來火乃中へ御入下され又此世
よてもやうの御苦勞下さるゝ事よとて大音をあげ狂氣れごとく泣
けれハとすがの悴も半焼にして止り仕合を佛よとて打捨置立出し跡
にて泪ながら佛壇へ入奉りしとぞ其後他の同行來り内佛拜禮して半
焼の本尊を不審におもひたづねられればとぞざる今までハ火の
中毒のちる乃御苦勞とハ聽聞いたせしが身よ入々と御恩れほどを存
ぜぬゆへ此頃悴れ惡知識の御蔭よて眼前よ火の中へ御入下されて此
婆母に御見せ下されてやうく無始已來此火の中ハ御艱難のほど御
知らせに預り夫より此御姿を拜みてハ儲もく私ゆへの御姿と一入

御恩のほどを喜ばせてもらひますとて涕を流し念佛唱へられしとぞ
誠に一文不通の愚なる老婆おれども信心れ智慧み入てこそ佛恩報せ
る身やハおれとの仲のごとしかくて文政の晩年齢ひ七十あまりに
く稱名絶間なく消るごとく往生とげられしやぞ此傳ハ近村の尼何某
の彼桑のもとへ度々行て直々御縁よ預りしとて物がたりせしまよと
書記すと僧純師の筆記よみゆ

○三州登乃

三河國奥郡多原よとれといへる仲信の人ありこの女若き時より御法
座をあれハ何方へも不欠よ參詣せしが其無我よ法を貴みよるこひけ
ると皆人隨喜して所々へまねきて御咄しと承り度といへば私ハ何に

もぞんじませぬが此墮行ものを必たすけるぞよの仰ひとつと信じ奉
るごよきにつきてもあしきにつけても御報謝の稱名を喜ぶばかり
と申されけるを皆人聞て喜ばれしとある或時矢矧の橋の上にてい
へるやうハ攝取の橋に不捨の欄干いか成それども落やうがはいどい
ひて喜しとある又あるとき誤て風呂の落し瓶へ落し事ある早速人來
てマレ氣毒やと引揚々ればその言やう私が今まで地ごとくへ落るこ
やと知らざしてうかくと暮して居ますゆへ御慈悲から御知らせに
あづかりましたといひて落涙して喜ひければ皆人感入しとぞ此人七
十余歳よて嘉永年中に目出度往生と遂られしとあり此在所の遠近の
諸人御法義に立入佛法御繁昌とありしハ此老婆は信徳の志からしむ
る所ありとぞ

○紀州長兵衛

紀伊國牟婁郡寶砂村に雜賀屋長兵衛といへる仰信の人ありこの村ハ
禪宗ばかりの中に長兵衛一軒淨土真宗みて古座村善照寺門徒あり
其活計ハ川船よて炭と七里川下なる古座へ出すと業とすこの人大家
かれども冥加と思ふ人ゆへ身と軽く持下部を同やうにいたらきて人
を救ふことと旨とせらまければ歸伏せぬ者かりけり又佛供田と稱
して二三反程米を作その米を上白み精て御佛前へ日々捧ふてまつ
る右の御佛飯を焚く薪ハ木を伐てより二三遍も能々洗ひほしあげて
夫より用られしやあり 又其米をもつて報恩講よ自他宗の差別なく
凡三四百人程も招き賑々敷つとめて御恩徳を喜ばれしとあり
又二十四輩順拜の同行來れば大切に敬ひて二三日ぞ逗留をねがひ

讚歎談合して喜び又信のかき人おれば二三里送ると歸る此由とどへばあれ人ハ未來の行所が違ふゆへ永の別と思へばおびかしくて多分送りしどいへり依て此人を異名して佛長兵衛を稱せしとまん又或人あの長兵衛おやうも人ても金に惑てあらふといひて長兵衛の追附此所を通る事をさつして金子を財布に入れて落し置ければ長兵衛夫を拾ひ上頂きて又元の所よ置いて過行ければ其ためしたる人實に恐れ入しとまん 又凶年のやき難澁の者より田畑山林等を預けて米を借度よしをものめハ一石或ハ五斗三斗と遣して救ひ其後彼田畑のあもひの安きものを買置てハ本意にあらざて先方へ本直よてみかかへしれしとぞ 又毎朝御佛前へ拜禮せぬものハ朝飯を止よと家内中へ兼て申きかせ常々佛様を大切よ崇敬せられしゆへ猫までも勤行中ハ坐

して参りしと也又御本山へも年毎に四度づゝ参詣して御冥加をせし上られしとぞ 或時狐お附たる娘途中よて長兵衛よ出會しが彼狐付誠よ恐れ入一縮よかりて逃しとまんよつてそれ娘お親長兵衛の信徳を感じつれゆきて言やう此娘の狐を退んよめ種々さまざま加持祈禱をいたして貰ひ候へどもいまに驗もなく迷惑して居ますといへば長兵衛狐附よ對て言やうハ萬物の長たる人間に附じいふハ不禮千萬かり汝が出世よも障る程に早そく退じよよく〜申きかせ南無阿彌陀佛〜と稱へければ狐恐入て離しとまん 又或山伏ありて狐をつかひ人よ泣けて祈禱をたのませ金錢を食るを業どぬす此者長兵衛ハ大家ゆへかれよつけと狐よ教けるが長兵衛にいつかおぼして夫より二十丁ばかりある所の女よ附しが其女の親不便よおもひて今の山伏に祈

禱と頼々れば狐附山伏に向ひて言に「いおまへが長兵衛殿よ附よ差
圖るまじもあの人の佛神の守護嚴重なれば密付こそが出来ぬゆへ此
人は附ましたと言しや也此長兵衛ハ仁愛ふかくして難澁のものハ
金銀米錢と人の知らぬやうにして施しめぐむゆへ其事 御領主の御
聽よ達し御褒美として金錢三文(壹文ハ銀子四拾三匁あり)頂戴せしとあり
又あるとき御領主御通行のとき途中よて御駕籠の御内よて長兵衛
の頭を撫たまひて汝ハ神妙なるものぞや仰られしやかん時よ文政年
中七十余歳にて目出度往生とやげらましとあり此老人の信徳よて其
邊ハ他宗門の人々もこそ御宗門よ歸依せしとぞ

○攝州とよ女

攝津國有馬郡光尊寺とよ女ハ御法談を大切よ心がけ上京せし折みは
寶成院仰誓師へ毎々法話をねがひ如實よ御恩を喜ばれしゆへ京都よ
て攝州へ消息を贈られしがあまそ難有とやおれば今爰にしるす
幸便よまかせ一筆申入參らせ候先もて
御門跡様益々御機嫌能御化導あらせられ御同意に恐悦奉り候次に
その表いづれも御無事み御恩の稱名御喜びおとるべくと目出たく
存參らせ候借京都におめても今月廿三日
禁裏御所様三十三歳にして崩御あらせられしが萬乘の御位やいへ
ども免がたきハ無常の有さまかりこの君は御政事嚴重にましく
て万民を憐給ひしゆへ人々一同御名残を惜奉る候へどものがれた
まはぬハ死の道かりよて御經の中には無誰代者と説給ひて百官

百仕代人々も一人として未來の旅路の供奉する人ハおはいはんや
 それ余の人をや宿世の業惡しくして賤き身や生れしもれ未來ハか
 びく落ぶれて地獄の餓鬼の畜生の三途からでは行方なきこの
 身にて地獄の猛火遠きとよはあらざ出る息ハ入とまると候得ば今
 夜中に火代車に乗るべきや明日の山に登るべきや其程は忘れま
 うさぞ候さればやて三途を恐れて未來善所よいたらんとおもふと
 も凡夫自力の功にてはかかしくかかぬことよ候とあるよかゝる
 者よあはれみよまいて五劫の思惟し永劫に御修行ましくして此惡
 人よたをけんがよめよ南无阿彌陀佛といふ本願をたてましくして
 一念歸命の端的に正定聚の位み入しめたまいて夜晝つねに光明の
 中に御まもりを蒙り息きれば次第安養淨土へ送りたまふこと誠にお

もへばありがたき御事に候かゝる御恩を蒙らうかゝる暮を事
 誠よあさましき事からんや夫も御慈悲のをけんたらぬもれからば
 怠ハ道理なれどもこの如來の御本願がくば祖師の御化導もかい
 それどきハ是非を獄卒の手よかゝり百千の劔に身をぞんくよ
 きらるべき我身を御助けといふ事もとりたるもの御恩をよるこ
 はぬハ借や何と忘たる心底ぞや兎角おもひに長繩をはるゆへに
 見へたり忘ければ一日くを御暇乞と思めして足手の働くうもハ
 寺参りもかげぬやう御内佛の御掃除もおこりなく口の動くあい
 だハ稱名念佛御とすれ有まじく候猶其上ハ此世のこやも美敷親子
 喧嘩もせぬやう夫婦兄弟中よくあて親子もろとも喜びく月日を
 送り追附御淨土のたのしきと御待なさるべく候拙僧ことん末ハ

短きといひひまがらそみく御恩を喜ぶ心もおこらば 御眞影様
へも毎日御禮を申せども飛立程の心もかく借々勿鉢なき御事候
まかしおがら命終りしだい極樂へむかひ取せ下さるやおもへば誠
よよろこばしき事に御座候娑婆逗留のあひだの御報謝よハ稱名相
續申斗に御座候まこぞよ諸國共一同に御法義益々御繁榮おされ候
得ハ存命てもうれしく又死してもうれしくこの世ハなんよも思ひ
残りともかく有がまき御事に候存命致候ハ御縁次第御目にかゝ
る縷々御ものかあり申べく候御同行御出合のせつハ幾度もくく賤
き身を御救ひの御本願のたふとき事ども互み御語合おされ候て御
稱名相續肝要に奉存候あの人ハ大やうかり不足かりと人のこと評
判するハ大なる損にて候向の人の心の内の喜びはいかゞ有や且て

とまぬ事に候兎角外側ばかり繕ふても本あしき生つきおれハ外側
れ通にいかぬものに候へばおつて自慢ハあらぬことに候間一人
くよ我ほどのいたざら者ハおしとがへり見て御喜び候事肝要よ
候御經の中よ謙敬聞奉行と説たまひて謙敬とハへりくだりて敬ふ
とにて候これ浄土門ハ肝要よ候間心を引さげ愚にかりて御喜びお
さるべく候此方の利口さへ出し申さば候得ば御教化を誠ようけて
喜ばるゝもの候間いつまでも出離の縁あることおき身と見おき
りつめて日夜稱名相續專一よおさるべく候おしこ

石州淨泉寺

仲誓

光專寺と女へ

○家内相續

蓮如上人御一代聞書より我妻子ほど不便なるものがあるべきが併にお
ら宿善なくばいかよせん我身ひやつと勸化せぬものがあるべきひや
仰らば候得ば我家の法義相續が肝要なり實は一家仁あれば一國仁と
興すれ道理なれば國の佛法ハ一家の法潤のあつきよりおこる一家の
相續ハ一人の深信より成るされハ親子兄弟互に同行の知識とかりて
出離よ心をゆたぬ大切よいたすべきとかり蓮如上人ハ佛法ハ讚嘆談
合にきハマるや仰せられたれハ兎角寄合ハ談合とて我信心を明ら
かよ治定すべきと肝要なりそれ談合よついで我眷屬をすて、此彼の
同行の許へ行て喜ばんと心がくる人のみ多し是等ハ家鶏をとりて、野
雉を愛するの道理みて今一入不足の心得かり實の法義相續ハ我家内

ともて眞乃同行をいたしたきものなり何ほど外の同行と交りて有か
たふ喜びても我家の相續が出来まひからは善知識の思召よは叶ハぬ
なれば亭主ハ家の司なればまづ第一は妻子眷屬を引ゑんと心が
け又女房は夫のこゝろを和ぐる身のうへなれば先自身は御法義を心
がけこれまで生々世々そこばくの男子をたぶるがして惡道へ引入し
との數忘れぬ怖しき女人の身を此たび轉じかへられたれば不法義を
る夫とも心をつくして此たびばかりハ極樂淨土へいざなひ度で日夜
こゝろを運ぶらばいかに邪見ハ夫もとも終ハ佛法よ引入らるゝ
かり又親の子をおんふ恩愛ハ流轉三界のまよひのたねなれどもその
恩愛を御法義に振むけて勸るならば迷ひの業の恩愛がへつて自信
教人信の媒妁となりて共々御慈悲を喜ぶ同行やあらるゝなり又子た

るものハ親へ孝行を盡すよつきても若親達が不法義からばいかやう
にきておるともすゝめねばならぬ今生よ孝養をばげむじも未來獄卒
れ手にしたしかば一世の行ひハ水の泡とるよしや此世ハ貧窮にて
衣食の孝養ハこゝろにまかせざとも未來ハ淨土の蓮臺みて百味の飲
食應報の妙服を受用せしめんれをせ二世の孝道をはげましかば佛
神も其孝心よ感應して方便力を加被しるまひ終よハ如來の御慈悲み
もとづく身とるべきなり然れば家内の中よて誰なりせも一人御法
義よ立入かば心を盡して誘ふが祖師善知識への御化導ハ御手傳かり
たやへば夜の明たるよ家内中が朝ねとて居るときハ先に目覚めたも
のが直に起て寢て居るもの故よびおこさねばならぬごごく多の家内
の中に誰よても一人善知識の御化導に夢れ覺た人あらば私ハ今まで

氣がつかざして無明乃夢をみて居たとれ淺猿ややふふたび邪見の聞
へばいらぬやう益々大切にいたし寢て居る家内を一人ぞゆりおこ
して後生の一大事をきかせたいとこゝろをつくして勸免ねばならぬ
去ながら爰に一の心得ありてそ乃目のさめぬ人を一時にみお起さん
ぞしても眠そのあさひふかひがあるゆへ先その眠りの淺き人から先
よおこさねばならぬごごくよく平生の機へんを考へて勸免やすき人
からまづ一人だけとおもひて實意を盡して勸免かば佛祖の加被力よ
て御法義にからぬ道理ハあるまじき事を一人を引入かハ早枯たる
薪が二本よあるぞ燃安きがごぞく一人の喜びが二人とて御法の
火勢が強くかるとそれが段々傍の人へんうつりて無宿善の生木もそ
ろくくと燃出をやうになり終よハ家内中打揃ふてうるハしく御法義

相續が出来やうよある夫について心得ねばならぬ事はいかほど心をつくしても誰か一人聞入てもくれぬと我にこれほどに骨折すゝむれども此方の家内は邪見がつよふて己が言ことを聞てくれぬといひて勸甲斐もなき事なればすておかふといふやうな不實なることゝるが若おこりるばあら淺ましやや我身の不足をかへりみてそれ過を改めるの心得よならねばならぬこれハ世間を見るにすこし御法義を聴聞して聞覺るとはや行届たやうにおもひて矯慢の心をおこして却て人を見下やうみある夫てハ我身は過をさるることやハならぬ只ひたすらよ御恩の廣大なる事をたもひて我心中の不足を慚愧すること善知識に御教をまもるすがたあるべきにも人乃不足ばかりが目よるゝりて我身をへりみるおもひがなくてハ誠は御法義相續にてハなし別

して家内ハ他の同行やハ違ふて常に傍ありて行住坐臥のどこかひとを見て居るものゆへ何ほど言葉をもつて勸めてもそれ行ひが行届ぬと感伏すべき道理をこれ御經の中にハ正己而後正人と説たまひ又古語にハ以口教訟以身教順をいへりまかれればたやひ後生を願ふ身にハありても王法仁義の道がかけてハ家内の法義相續ハ熟しがたし先身が行ひを正ふとて己が心もうも和らき我功を人にゆづる人の善を奪ぬやう己が過に道理を付てまけおしことを言ぬやう万事よついで家内はれが隨喜して御法義といふものハ有がたいものじやや我不法義を恥入やうにさへかれば強よ言ばを費さぞ共家内乃法義ハ出来るをれかりまがるにいかほど勸め誘ひて家内が聞てくれぬならはいよく我身は行届ぬゆゑありと慚愧してまを

く自分乃法義を大切に心かくべし。倍二ツにハ佛祖ハ御恩に對して怠る心をいましむるの心得これハ阿彌陀如來ハ久遠劫來今日まで逃つかくれつきたる我等ハ御目おひ御慈悲よて一度ハくの御念力が今ハ行届く下されたればこそ救ひける邪見ハ私が佛法み耳かたむける身じかり得あることぞとおもひ。又祖師善知識ハあつき御苦勞におもひくらべてハ二つハ二月や三月己が心をつくして家内をなめた事を思よさせ是ほど骨どりても聞てくれぬほど不足のれもひぞおこさすべきやうを思ふことハこれ催すべき道理はなき筈のこととす。すべて佛菩薩の聚生濟度し給ふは一人のために百千万劫身とて命とてハ御苦勞とす。まへとも一念の悔と心も起し給ふとハかして御經の中に説せられてあり然ればいかほど辛抱しておとじも

御法義に引入たひやこゝろがけおは家内の者法義にからぬ道理ハ有べからば華嚴經ハ中に一人を勸めて後生を願ふ志しとおこさせたる功德は無量無數劫のあひだ金銀財寶ハいふよ及ばば妻子にもあれ我身の骨肉よもあれ衆生の望みに隨ひてこれをほどこしたる功德より猶廣大なりと説せられたり。たれば妻子兄弟をばじめ一季半季の下女下男まで誘ひて自信教人信の道理に叶ひたきものなり。倍信の上からは互よみを眞の同行同侶おと心得て讚嘆談合をいたしいよ。く禮儀を守りてむつまじく暮さねばならぬ此上よ心得ねばならぬこと。ハ家内中が我がちよ出かけると家の留守の仕手もかく内のままりが惡ふなり世間の仁義もときまへぬやうよありてハ忽ちハ他の嘲りともねき仁義の道もかげて却て御化導の御差支にもなることおれば篤

や心得置ぬハからぬ事あり先當流の御教化ハ内心にふかく他力の信心をもちいへておもてにハ王法仁義を本とせよと仰らるゝことなれば御法義相續する身はいよく家業を大切よせねばからぬ法然上人の御言葉よ世路ハ警を往生ハ資量とあてがひ妻子眷属を知識の同行の御ものゑとたたまへば世間のつとめをみま佛法の御用ありと心得王法仁義も信心ハ守護ありとぞんじて堅くこれを守御法座参りのせつも互にゆづり合て足手とはこひ子供や下部ばかりに留主とせて人の口よめしらぬやうめはるゝ一人づゝ留主しあひて世間ハ仁義もかゝぬやうめするもあらば参詣せし者も心置なく聴聞し又留主せし人も今日も留主番じやとて御法義よはおれて仕舞てハからぬ體ハふたつおさまものゆゝ留主したときハ法坐へ出られぬとも心に留主とせぬ

やう嘘今頃ハありがたい事であらふとおもひうかべて御恩の稱名を稱へとろこび程なく下向せられおは聞せてもらとんど待こおれて居るならば参りもものハ参らせて貰ふたとの嬉しやと留主とて下された人の恩をおもひ留主したるものハ我ためと聞て來て貰ふたことぞや喜んで参下向ハ挨拶もかゞさぬやう歸た上へハ聴聞したる趣きを互に語り合て喜ばるゝならば坐毎ゝ家内中が残らば参詣したるも同じことをあり

又家の留主も堅固なまば家内中がみる内よ居るも同事かくのごとく家内の心が打和げば潤しく御法義乃相續が出来るなり今ハ佛法ハ王法とが我身一ツよあつまりきて行住坐臥が佛法なり王法なりとおもこれ何の苦もなく心面白くまもられて現當二世目出度契を得ること

とをひとへに人界受生に大慶ぞんじ佛祖善知識の御恩ハ勿論を
佛法守護の御國恩をわかれぬやう毎事よこゝろをもちいたまはゞ夫
こそうつくしき心得よて一家の御法義相續がつひよ一郡一國の佛法
弘通の基であるべき事なれば能々心得べき事あり

○惠心僧都の母公

むかし比叡山惠心院の僧都とてやんごやなき知識まよくけり父君
ハ卜部のなみおし母公の姓は清原もじハ大和國葛木の人なり父ぎみ
にハおさなきうやにまかれたまひ志が母公父の遺言よよりて兒をば
叡山よのばせ慈惠僧正よつけて得度せよめけり兒もやと稟賦人に
踰て英敏く學業をばげみてすこも懈ることなかりければ内の御八

講代時年十六にして問者をつやめられけるにろの雄辨なる満座の人
を驚かしければその座みて直ちに僧都の官にさせよまへり其後惠
心院の僧都として令名世よかくれなかりき僧都嘗て孝心ふかくどはし
ければ故郷なる母公の歳たまたまひて家もわびしきことゆゑ如何に
もして母公のこゝろやゆく生活せられんやうにとこゝろを志しハふか
くおはしましなれども力及ばぬばたゞおもふばかりの有様みて月日
を送りたまひたる或る時しかるべき所より佛事の導師よ請待せられ
て若干の觀施を得たりなれば僧都最うれしきことをにおもハれ急ぎ母
の許に携へ往きたまふ僧都心よおもハれけるハ此ごるは母公の活計
も最たゑくまき事なれば此ごをことくまゐらせたらんよはさぞ
よろこばれんや然るよ母人ハこれを見て顔うちろむけつゝさめ

く泣きあまは僧都は如何にも心得がたき体にてたはせしごと
 ろに母公は涙を押しつゝのたまふやう我今世ばかりをもちたられんと
 おもぬあらは何ぞ其許を出家をすべきやたゞ俗にて置くべきあり
 且ハ家傳へ襲ふどころの官祿もありしことおれば公よつかふまつ
 るやとさかおら卑く賤くしてあるべきよあら然れども父も我も後
 の世の事こそ由々敷大事おれ今世の富貴榮華はゆめまぼろしおまじ
 おまじばこそ最惜しき官祿をむかへりみせ法師よはあしつるあり左
 るほどよ山にのぼりてよりこのかた日夜學業にとこたらせと聞この
 年ごろハ末頼母をく暮しつるを何ぞはからんいま將た利欲の惡業
 を見んやハこのあぢましむよと詞いまだ了らざるよまたうちをたれ
 て泣あまひけるにぞ僧都ハこれを聞たまひ深く慚愧し道心ますますく

堅固よして名聞利養の根を絶ち去り僧官の昇進せんことゆめめとら
 望みたまはせさむある年のころより横川にひき籠らせたまひ後生
 菩提をめよつやめおこなふの外他事おかりしかば世は活佛のごと
 く崇め慕ひけるごまや
 此惠心院の僧都やまうすハ即ち七高僧の第六源信和尚に御事あり
 ある人のいはく女は男にぞくれてのち子にしたがふものありとい
 ども父失せて子のとききほどいとしへ戒むる道ひとへ母のせらから
 よよることある此ころなくして只管子に打まかせたる母ハ物くる
 ハ子あれば孝行とおもひつゝその物ハ何によりて得たるご云事を知ら
 せ子の身に榮を見てともに奢どきいめを身ほどを忘るゝゆゑに
 わざいひどもねき家と亡ぼすもの世よ多しや

又ある人の曰く今此僧侶の母より坊守たる人その子その夫の名を營かみ利をんとむるがためよすることやを戒めまたこれ然諫むる事を爲してその道心をすゝめはげますものありや否やたゞおそらくは物をやるとよき弟子をいひこれを信心の人やいふたぐひにして其子を教へて利欲の悪業をつくらしめその夫よすゝめて身は榮をのぞみ奢りどきはめんことを謀るやもおら多からんぐのごときやもおらハ深く恵心僧都の母きみよはづるやころあるべきなり古語よいとくろれ子ばしらまくおんハゞその母をみよや又いはく父の子を誨ゆることハ母よ一倍して子の母に似ることやハ父よ十倍すは是等ハみか人ハ母やあるべき婦女子の善きいましめにして實に母の教へ育るやころその道よめあふとさハ小學校乃教育にもはるむにまされる効能ある

もはるるゆゑよ子を教ふる道よふかくれそれつゝしみつねよころにこめてゆるがせよとることあるべし故よ又古ハ賢女の詞よ子乃おさなくしておこたれるは母の科を人せかりてのちつがハれざるハ父の科なりと又いはく子はあしくかりたつことハおほゆるハ母たる者その科をかくすゆゑに父知らざして正をこやかければかりと左ればいにしへより母の訓は行届きたるよ由りて良き子を養ひ成しあること多し殊よ出世に要法を信ざる身やしていたづらよ利欲乃こそにのみ心をくばり慚愧を念なきハ耻てもぬほあまりありまして自ら信じ人をたしへて信ぜしむるの職任あるものを子ととるものをや然ればすかハも平生女のつぎむべき裁縫をことと怠たらば家の活計ハあるべくつゞまやめあふと旨とし其子といましめて學びの道よ怠

らざらしめ學識なくして名を求め徳望なくして利を貪るがごときこ
やを耻いやしむるれ道を以て子を教ゆること善女人やいはるゝ人れ
行ひとはいふべ々れ既に世間門にあててすら賢婦烈女を稱せらるゝ
ものゝ内みおいてその子を戒めはぢくやむこゝろを起さしめ不義の
利よ遠ざかり分よ過たる名を得ることを避けしめたるよよきて翻て
その子の名を全ふし家も亦富榮たるよえし多しやぞ

○江州神崎郡林村某

某氏ハ同村長泉寺の檀家にして先頃から氣が變しくかりて晝夜とも
家の内を駈廻りてソリヤ己れの親分の稻荷さまがござつた早く油揚
に赤豆飯を焚け鼠は天麩羅が食ひたいと口走るゆゑ此奴ユン

くに魅れたかど家内親類ハ寄合つて種々評議しよれど何ぶん人カ
の醫藥よは及ばぬかと此上ハ此奴らの本家本元の京都の稻荷山の稻
荷さまよお頼み申より外ハまいと決着し狂ひ廻る病人を駕に乗せて
西京へ赴き伏見代稻荷へ至りて詞官の大講義田村貞道とれに會ひだ
んくの仔細を述て何卒御祈禱を願ひますと云ふとき田村氏ハ暫ら
く考へて此者の宗旨ハ何だど云ふに真宗でござりますと答へたれば
其時田村氏ハ膝立て直し然らば此の病人は未だ真宗に法義を深く聽
聞せぬと見えたり真宗の宗意を聽聞せし人みハ狐狸かどの魅をのよ
あらざ此男の斯く魔物の爲み若めらるゝは全く法義を聽き安心立命
の地よ至らざる證據あり早く此坐を去り手次にいより既往の罪を悔
ひ謹んで宗義を聽聞させよや以ての外よ窘められ親類の者ハ驚き

て歸宅せうへ長泉寺に詣て住職圓乘氏よ此の始末を語りて御宗意の
安心の旨を聽聞したしと請ひたれば同氏も歎びて世に狐の魅くまど
云ふハ決して無きことにて是ハ神經の狂ひたるが其様も見ゆるもの
かゞされば宗意を聞き安心乃要を得たる時にハ平愈疑がひおしと懇
ろよ諭し御宗義をだんく説き聞かせたれば病人も首を傾けて隨喜
渴仰したる様ありしが夫より次第よ本心よ復りて藥りも服み家内の
者も今までの迷ひを醒して看病しるれば昨今は全快して此ほど當人
が自身で田村氏の許に來て禮を述べた程にかつたりや

妙好人傳四篇終

